

魔術師シモンとフォロ・ロマーノの「石」をめぐる試論

—トウスカーニア、サン・ピエトロ旧司教座聖堂壁画を手がかりに—

伊藤 怜 (早稲田大学)

「すべての異端の父」とみなされた魔術師シモンに関する言及は、使徒言行録から、教父による著作、聖書外典、説教集など多岐にわたって認められる。シモンは、初期キリスト教美術以来、中世を通じて、単独場面または使徒ペテロ伝サイクルというコンテクストで壁画、彫刻、写本挿絵に表されており、絵画表現の主要な典拠としては、聖書外典『ペテロ行伝』と『使徒ペテロとパウロの殉教録』（以下、『殉教録』）がある。

ラツィオ州トウスカーニアのサン・ピエトロ旧司教座聖堂は、11世紀末頃の制作とみなされるモニュメンタルな壁画装飾を有し、内陣北壁面には、使徒言行録と『殉教録』を典拠とする、ペテロ伝サイクル6場面が配される。最終場面には、シモンの最期についての「魔術師シモンの飛行と墜落」が描かれ、墜落したシモンの下方に円形モチーフが確認できる。このモチーフは、シモンの身体半分ほどの大きさで画面中央に表され、見る者に注意を促す。先行研究では、ローマの聖堂装飾との様式的類似性やモチーフの指摘に関心が払われ、トウスカーニアのペテロ伝は伝統的図像を踏襲したサイクルととらえられた。円形モチーフの存在に関しては、ヴィーヤールが指摘したのみだが、その考察は細部には及んでいない。

本発表では、トウスカーニアの典拠とされるラテン語版『殉教録』に注目し、円形モチーフが死後に「石」と化した魔術師シモンと考えられることを明らかにする。さらに、トウスカーニアの作例を手がかりとして、初期中世から中世末期の史料を確認し、中世ローマにおける「石」の表象に関する考察を試みる。

ラテン語版『殉教録』の本文と補遺は、サタンの助けで空を飛び始めたシモンが、ペテロの祈りによって、フォロ・ロマーノの中心にあるヴィア・サクラという通りに落ち、四片に砕け、地面の四つの石と結合して、「石」となり、それらの「石」は使徒の勝利の証とされたと伝えている。典拠に従えば、トウスカーニアのモチーフを「石」と化したシモンの象徴的表現とみなすことができよう。

さらに、トゥール司教グレゴリウスの『殉教者の栄光』、『歴代教皇録』、『政治の書』、ペトラルカの書簡などでは、シモンを落とすためにペテロとパウロが祈った際に膝をついた「石」との混同があるものの、シモンの「石」は中世ローマで一種の聖遺物として機能していたと確認できた。『政治の書』には、復活祭後の月曜に行われた行列で、ローマ教皇がフォロ・ロマーノの「石」に上っていたという記述があり、「石」には象徴性が与えられていたと考えられる。以上の考察から、トウスカーニアで確認された「石」は、魔術的力に対する使徒たちの勝利を想起させるモチーフとして、中世ローマ的コンテクストにおいて理解され得るのである。